

「中身当てクイズ」を解く

二〇〇三年度から実施された高等学校の新学習指導要領の「現代文」では、教材として「現代の社会生活で必要となる実用的な文章」を取り上げることが求められている。この点などを受けて、「現代文」の新しい教科書『高等学校現代文』と『新編現代文』では、四種の教材を用意した。その中の二番目の教材が、佐藤雅彦の「中身当てクイズ」になった。

「中身当てクイズ」が収録された『プチ哲学』（マガジンハウス、二〇〇〇・六）には、見開き二ページに一つずつ、身近なテーマが取り上げられている。すべてが漫画と「今回のテーマ」という文章から構成されたもので、「中身当てクイズ」における「今回のテーマ」は、「情報がない、という情報」である。

「中身当てクイズ」では、一〇コマの漫画によってストーリーが展開する。三段になっている階段の上の一つずつ、合わせて三つのカップが置かれている。そのカップに向かってポットが話しかける。一コマ目から四コマ

目にかけての設定をコマごとに確認すると、次のようになる。

- 1 カップには自身の中身を知ることができない。
- 2 カップの中身はコーヒーかミルクのどちらかである。
- 3 三つのカップの中身はすべて同一ということはない。
- 4 上に置かれたカップはその下のカップの中身を見ることができる。

ポットは三つのカップに、「一人だけ自分の中身がわかる人がいる」と語りかけ、その人に手をあげるように要求する。三つのカップは、それぞれ次のような現状を確認した。

下の段のカップ⇨状況がまったく分からない。

真ん中のカップ⇨下の段のカップの中身はコーヒーであることが分かる。

上の段のカップ⇨下の段のカップの中身はコーヒーで、真ん中のカップの中身はミルクであることが分かる。

以上のような状況の下で、三つのカップは「うーん、うーん」と考える。それから間もなく「あっ わかった！」と静かに手をあげるわけだが、「さてそれは誰だったのでしょうか」というのが「クイズ」である。

このクイズを解くカギは、上の段に置かれたカップにある。下の二つのカップの中身に関する情報を持っている上の段のカップは、三コマ目の「三つのカップの中身はすべて同一ということはない」という設定から、もしも下の二つがどちらも同じ中身（二つともコーヒー、もしくは二つともミルク）であったとしたら、自らの中身がそれ以外のもの（もしも下二つがコーヒーなら、自分はミルク）であるということを知ることができるはずである。ところが実際には、下の二つのカップに違う中身が入っていたため、自身の中身を確定することができない。

そこで次に真ん中のカップにスポットを当ててみよう。真ん中のカップには、下の段のカップの中身がコーヒーであるという情報がある。そしてもしも自分自身の中身が下と同じコーヒーであったと仮定したら、上の段のカップは自身の中身がミルクであることが分かり、手をあげるはずである。ところが上の段のカップは手をあ

げない。となると、そのことから逆に判断して、真ん中のカップは自分の中にコーヒーではないもの、すなわちミルクが入っていることに気づく。

したがって「クイズ」の答えは、「真ん中のカップ」ということになる。

著者の佐藤雅彦は、この「中身当てクイズ」から「情報がない」という情報」というテーマを引き出している。その具体例として、「便りが無いのはいい便り」ということわざが掲げられている。すなわちこのことわざでは、「情報が無い」ということが「無事暮らしている」ということの「情報」になっている。これと同様に、「中身当てクイズ」に出てくる真ん中のカップは、一番上のカップが自分の中身が分からなくて手をあげないということ、すなわち「情報がない」という「情報」を得て、自分の中身がミルクであることを知ることができた。

教室で扱う際には、まずこの「中身当てクイズ」における「クイズ」が何を問うているのかを明確に理解させるところから出発することになる。漫画を読んで、ストーリーの設定と展開を正確に読み取ることが最初の目標である。そのうえでさらに「クイズ」を解くという作業に取り組ませるわけだが、解答だけではなく、必ずそのように判断した理由について説明させるようにしたい。

教室は解くことができた生徒と、よく理解できない生徒とに二分される。解くことができた生徒から、理解できない生徒にいかに分かりやすいプレゼンテーションが実現できるかどうかのポイントになる。

クイズが解けた段階で、改めてテーマの「情報がない、という情報」について考えてみたい。生徒たちに身近な場所から、「情報がない、という情報」の具体例を探すように促す。例えば台風が接近しているとき、テレビを見たら平常の番組が放映されていたという場合、台風関連の「情報がない」わけだが、これがまだ台風の大きな影響はないということの「情報」になっているということなどは、日常生活の中でよく知られるところであろう。もしも深刻な影響が出るような事態になれば、テレビでは台風情報に関する臨時ニュースを流すことになる。このように、身近な場所から「情報がない、という情報」の具体例を探すということが、「中身当てクイズ」の世界を広げてくれる。教室でいろいろと意見交換をして、問題意識を大いに深めるようにしたいところである。

『プチ哲学』の中に収録されたテーマは三十一に及んでいる。著者によれば、「プチ哲学」とは「ちよっとだけ深く考えてみる」ことである。この本の中には「中身当

てクイズ」のように、表現を通して身近な問題を「ちよっとだけ深く」考えるための素材として、授業の中で活用できるテーマが多い。扱いを工夫して国語科の学習活動に有効につなげるのは、国語教師の力量でもある。

(町田守弘 まちだ・もりひろ)

《参考文献》

『プチ哲学』の表現指導——新教材開拓のために」町田守弘（『早実研究紀要・第三六号』〈早稲田実業学校〉二〇〇二・三）